

山梨における文庫活動（伊東）

## 山梨における文庫活動

— 浅川玲子と一坪図書館 —

伊 東 久 実

### はじめに

一坪図書館とは、公共図書館の設置状況が他県に比べて劣っていた山梨県において、図書館不足を補い、従来行ってきた移動図書館の活動をさらに県民に密着した図書館業務として提供するために、1973年から山梨県立図書館によって設置を推進された住民のミニ図書館である。なお、一坪図書館はボランティアで募った館長個人に運営が任されていた読書施設であるため、ここでは文庫の一形態と捉えることにする。

1970年代、日本各地で住民に役立つ図書館活動の実施という理念の下に新しい図書館づくりが展開される中で、山梨の一坪図書館の構想も生まれた。従来の移動図書館（自動車文庫みどり号）の利用者の固定化と要求の多様化を背景に、一坪図書館の設置目的は、地域の特性に即した図書館サービスの提供、県民の読書普及、さらに県下図書館網への足がかりの3点であった。

一坪図書館という名前には、「施設は完備されなくとも最小の広さで最大に活用し、一坪から将来百坪にもなる施設のために理解のある人に運営してもらい、効率的運営を図ろう」という想いが込められている<sup>1)</sup>。そこで、食料品店やたばこ屋の店先、一般家庭の玄関や物置、寺院や公共施設の一部などを設置場所として図書の出し出しが行われた。運営にあたって、県立図書館が当該市町村と十分に協議し、地域の住民や市町村の意向を反映させて、市町村立図書館、市町村教育委員会、地域住民その他と一体に

### 山梨における文庫活動（伊東）

なって進めた。館長の職には市町村教育委員会を通してボランティアを募り、運営は週1回2時間以上の定期的開館というルールを県立図書館が定めた以外は、館長に任された。あくまでもボランティアとしての気持ちを優先し、地域の人に貢献したいという人の申し出によって開始されたのがこの一坪図書館である。

貸し出し図書は県立図書館が直接配本するのではなく、各市町村教育委員会を経由して館長に配本されるという工夫がなされた。これは、市町村に責任を持たせるための措置である。児童図書140冊、成人向け図書60冊の計200冊の図書が、40～60日ごとに交換された。

このように運営された一坪図書館は、1973（昭和48）年に県下第1号が南巨摩郡増穂町に開設され、翌年には一挙に150館が設置された。その後は毎年拡大し、1985（昭和60）年の総数は600館を超えた。これは、文庫活動が日本中で盛んであった当時でさえ、全国的に類を見ない突出した数である。

山梨県立図書館と市町村教育委員会の働きかけと、住民の協力によって歩み出した一坪図書館は、当初の計画どおり1978（昭和53）年から各市町村への移管が始まり、1985（昭和60）年をもって624館すべての移管が完了した。しかし、この移管完了時をピークとして、一坪図書館数は減少へと転じていく。この急激な減少もまた、全国的に類を見ないものであった。

『全国子ども文庫調査報告書』<sup>2)</sup>と「甲府文庫連絡会に参加する文庫数」から筆者が算出した一坪図書館数の推移を次に示す<sup>3)</sup>。

表 1 文庫数の全国平均と一坪図書館数

調査年	全国平均	一坪図書館数
1974年	41.50	145
1980年	86.09	422
1985年	—	624
1993年	83.20	29

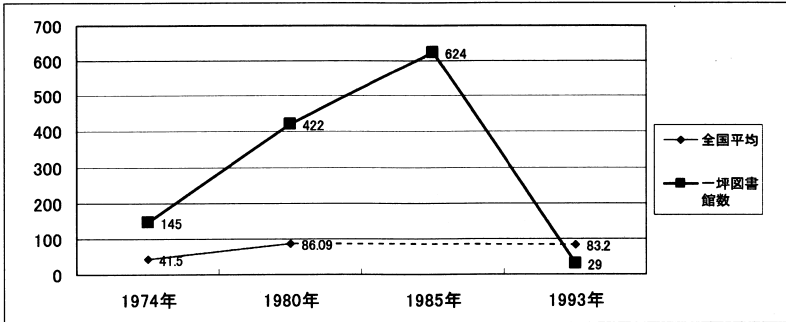


図 1 文庫数の全国平均と一坪図書館数の推移

一坪図書館については、これまで行政の立場からの設置理由、運営方法、1976年までの現状や実践例は明らかにされている<sup>4)</sup>。しかし、一坪図書館の活動の背景には、一人の司書が存在し、彼女が子どもとの実際のかかわりの中で痛感した必要性を行政に働きかけ、このムーブメントを支える大きな役割を果たした点は明らかにされていなかった。さらに、一坪図書館の急激な減少についてはその理由についてほとんど言及されてこなかった。

本論文では、この全国的にも珍しい盛衰を描いた一坪図書館の取り組みを、当時県立図書館の司書・普及係りの一人として行政面で推進し、同時に一坪図書館の世話人として実践に携わった浅川玲子の取り組みを明らかにする。一坪図書館運動に携わった多くの県民の中でも、運動を進めた行政人と、実際に一坪図書館を運営した実践者としての両面を持つ人物は、

## 山梨における文庫活動（伊東）

浅川一人である。この2つの面を持つ浅川は、山梨の文庫活動、図書館児童サービスの発展を考察する上で不可欠の存在である。

ここでは一坪図書館の構想開始からその興隆期と、移管完了後の減少期の二期に焦点化して、浅川がどんな使命感を持ち、何に悩み、どう対処していったかを本人への聞き取りや、当時の刊行物から明らかにする。このことは、全国的にも類を見ない短期間における一坪図書館数の急激な増減の原因を明らかにすることになる。二期に焦点化した理由は、その中間の全盛期における一坪図書館の活動内容は、後述するように各一坪図書館長の主体性に任されたため、浅川自身の活動として語ることが困難であるからである。

### 1 一坪図書館構想開始から興隆期まで

ここでは、一坪図書館の構想開始から興隆期における浅川の活動を明らかにする。山梨県立図書館の呼びかけで、市町村教育委員会の関与の下、地域ボランティアの手によってその運営がなされた一坪図書館は、1973（昭和48）年の開設以降、1980（昭和55）年には450館が開設された。この数は全国の文庫総数平均86館を大幅に上回っている。そして1985（昭和60）年には山梨県内全域で600館の開設に及んだ。誰の、どんな発想で、どのような言葉によって地域ボランティアの意識を喚起したのか。浅川の図書館司書人生のスタートにその鍵は隠されていた。

#### 1. 1 山梨県立図書館子ども室時代 一子どもの身近に本を—

昭和28年「子どもと本が好き！」で就職した先は、山梨大学教育学部附属小学校（現、山梨大学教育人間科学部附属小学校）学校図書館。これが浅川の55年に及ぶ子どもと図書館人生の始まりである。

結婚、子育ての約7年を経て、再び司書として勤務したのは山梨県立図

### 山梨における文庫活動（伊東）

書館子ども室であった。「珍しいことに、私の場合は県立図書館内の異動だけで、子ども室に継続10年間、その後一坪図書館の仕事に係わり、仕事を通して図書館へ来館する子どもや県内各地の一坪図書館へ来る子どもたちへの読書普及に努めた」というその歳月は、彼女を子どもと子どもの本の専門家へ導いていくことになる。

勤務当初、県立図書館子ども室は現山梨県庁南別館2階に所在したが、昭和45年に丸の内新館舎に移転した。新館移転にともなって、子ども室は1階の利用しやすい位置に置かれ、子どもや親子連れが抵抗なく出入りできるように、一般利用者とは別に北側に出入り口が設けられた。また、丸の内のこの地は、隣に春日小学校、前に中央公園という立地条件に恵まれ、子ども室を利用する子どもたちは徐々に増し、内容も充実していった。週末ともなると子ども室は子どもたちで溢れ、常勤の職員の他にアルバイト2名を依頼してサービスしなければならないほどの活況を呈していたという。

県立図書館の貸し出し登録者の半数は子どもで、貸し出し冊数も児童書が一般書を上回り、昭和60年代までは貸し出し冊数の半数は児童書という盛況ぶりだった<sup>5)</sup>。楽しげに本と交わる子どもたちの姿を目にして浅川は、喜びと同時に「近くに図書館のない地域の子どもたちはどうしているだろう」と感じていた。

県立図書館は、本館を利用する機会に恵まれない農山村を対象にして、それまで自動車文庫（移動図書館）の巡回を行ってきた。しかし、巡回周期は50日から60日と長く、しかも定められた日時のわずか30分程度の貸し出し業務であった。

県下全ての地で、子どもたちが歩いていける距離に図書館があったらなあ。動かない図書館があったらなあ。

## 山梨における文庫活動（伊東）

この想いは、全国的な地域文庫活動への関心の高まりとともに、浅川の中で、日に日に強まっていった。

### 1. 2 子どもの本を読む会

新館子ども室を利用する子ども数の増加と共に、県内各地から親子連れの来館者が増していく様子を目の当たりにしていた浅川は、ある考えを抱いた。

図書館に来られない子どもに楽しい本を手渡すには、司書の私一人の力では限界がある。一人でも多くの母親や先生と手を結びたい。

子どもの本のすばらしさを多くの母親に知ってもらい、自身の考えに賛同する自主的な協力者を得るために、「子どもの本を読む母親の読書会」への参加を来館する母親たちに呼びかけたところ、50名ほどの申し込みがあった。これをきっかけに昭和46年2月、「子どもの本を読む会」は誕生した。以前から、すべての子どもの身近に本をと考えても一人の力の限界を感じていた浅川であったが、子どもの本のすばらしさに関心を持つ大勢の母親の存在を発見したことは、一坪図書館運動を推進する大きな自信と原動力となった。

一人でも多くのお母さんに子どもの本を知ってもらい、地域での子どもの読書運動の核になっていただけたらと、欲張った願いに対し、関心を持った大勢のお母さんが発見できたことは、大変嬉しいことでした<sup>6)</sup>。

集まった50名は2つのグループに分かれ、すばらしい本との出会いを熱

### 山梨における文庫活動（伊東）

心に求めた。「子どもにどんな本を読ませたらよいか」<sup>7)</sup>という母親たちの問いを探索すべく、毎月一回の例会が開かれるようになった。この例会では会員が交替で当番となり、子ども室の係りと相談して、例会の司会、記録、読書会の資料作り、絵本と童話一冊ずつの選書が行われた。選んだ本は例会の1ヶ月前から会員内で回覧して、あらかじめ家庭で子どもと読んで話し合ってから読書会に臨んでもらった。

この読書会に対して、図書館の担当者である浅川らは、一年の間は共に出席し、会が一人立ちするまでの間の援助を行ったが、その後はあくまでも自主的なサークルとして活動できる「自立」を支援した。つまり、一人でも多くの自立的な協力者の育成である。会員一人一人が子どもの本についての大切さを認識し、地域のリーダーとしてPTA活動に読書会を催す会員も現れるようになった。

こうして浅川の蒔いた種は、一つまた一つと芽吹き始めた。一坪図書館の初期の担い手となったこの読書会の会員の手記が物語る。

ある日例会の後、もっと身近に本を借りられる場所があったらという話し合いになり、皆それは臨んでいることであった。地区の公民館など出歩いていける場所に分館があったらどんなに便利で、また読書人口も増えるだろうなどと夢の理想論を話し合った。次第にその理想は凝縮され行動に移された。もちろん浅川玲子さんの絶大な援護があったからこそではある<sup>8)</sup>。

浅川の子どもの本のサービスを充実させるための自主的な学びと、協力者探しは様々な形で展開されていた。「日本子どもの本研究会」「児童図書館研究会」「東京子ども図書館」「児童図書館員養成講座」など、休みを取って自費で精力的に参加した。1971（昭和46）年に開催された「全国子ども

### 山梨における文庫活動（伊東）

の本と児童講座」では、以後山梨の文庫、文化活動の発展を互いに支え合うことになる一人の女性、楠祐子と出会う。また、時を同じくして、山中東小学校の教諭横森サチ子との出会いをきっかけに、三者の交わりから1972（昭和47）年「山梨子どもの本研究会」を発足させた。小学校の先生や学校図書の司書など多数の会員が子どもの本についての勉強や読み聞かせの勉強を行った。さらに「子どもの本の学校」を発足させ、児童文学者の講演を催した。こうして「子どもの本を読む会」同様、多くの人に子どもの本の楽しさを伝えていった。

これら読書会の実践は、一坪図書館が各地で開催されるようになってからもなお、「読書会の必要性・読書会のもちかた、育て方」の確かな指針として、一坪図書館長らの役に立っていた。

#### 1. 3 一坪図書館の誕生 ー耕された土地にー

浅川の子どもと子どもの本に対する愛情からもたらされた地道な住民の意識の開発は、山梨県立図書館の掲げた新たな読書普及活動である「住民に役立つ図書館活動」という行政側の必然性と合致して、一坪図書館を生み出すこととなった。当時の図書館活動の現状は、次のように報告されている。

本県の公共図書館の状況をみまると、関東地区の中でも公共図書館の設置数については最低の部にランクされ、市立図書館（甲府、大月、都留、富士吉田）は、七市のうち四市にすぎない。（中略）当初にかかげた目標の、市町村に公共図書館をひとつでも建設されるように、またこのことを促進させるためにと、移動図書館活動を行ってきたが、現在果たして納得のいく状況であろうか。（中略）青少年をはじめとして就業人口の増加、在家庭人口の減少、ひいては昼間人口の少なさ



## 山梨における文庫活動（伊東）

におよび、反面、利用者の要求は極めて多様化し、現在の移動図書館の現状と規模をもっては、住民の要求に対処することは困難になってきたのである<sup>9)</sup>。

これに対する改善目標として掲げられたのが地域住民の意識開発（人間が一生を送るうえで、いかに知識が必要であるかを本を媒体にして知らせること）、従来の移動図書館運営の改善、県下図書館網の整備であった。そのためには行政が住民と結びついた活動を立ち上げる必然性に迫られたのである。1973（昭和48）年4月、浅川は県立図書館の普及係の一員として、一坪図書館の構想に着手した。

「地域の特性に即した図書館を限られた予算の中で……」。ここで、浅川が子ども室で子どもと直接関わった経験、また自主的に参加してきた研修で得た知恵、さらに様々な読書会で得た賛同者が、一坪図書館を誕生させる大きな後ろ盾となった。

一坪図書館はその名のとおおり、最小の広さ（一坪約3.3m<sup>2</sup>）で、理解ある人が効果的運営を図ろうとする新たな読書施設である。また、従来の移動図書館は図書の貸し出し業務が中心であったが、これらに紙芝居や映画フィルムとの貸し出しと、各種集会行事を加えた。重点は子どもの読書に置き<sup>10)</sup>、図書編成内容を1セット200冊のうち児童書70%、一般成人図書30%とした。県立図書館の利用者の半数は子どもであるという経験知と、読書普及に携わる一人の力の限界を認めた協力者の開拓、全国的な研修場所を求めた読書推進運動での学びのすべてが、まさに浅川だからこそ持ち得るアイデアの源となって一坪図書館運動を推し進めたのである。

こうしてスタートした一坪図書館は短期間に県下全域に広がり、1985（昭和60）年には624館となりピークを迎えた<sup>11)</sup>。県立図書館が設置を推進し、館長には各市町村教育委員会を通してボランティアを募り、運営され

## 山梨における文庫活動（伊東）

たのであるが、どのような言葉で地域ボランティアの意識を喚起したのだろうか。また、何がここまで急増させる原因だったのであろうか。浅川は振り返る。

「動かない図書館を作ろう！子どもたちの身近に本を置こう！県立図書館子ども室へ足繁く通ってくる子どもたちのように、すべての地域の子どもたちに歩いていける距離に図書館を設置してあげよう！」この言葉にこれまでの思いを込めたのです。

すでに浅川が立ち上げた各種読書会の参加者も、地域の核となり、この言葉を広める準備は整えられていた。そればかりでなく、翌年県立図書館長に就任した上野正は、双葉町（現、甲斐市）から県立図書館を利用する親子が、自主的に書き綴った読書ノートを県知事（当時、田辺国男）に持参した。一坪図書館の真の有効性を認めた県（知事）は、年間図書館予算に「一坪図書館費」を設けると共に、年一回行われる一坪図書館館長会議にも県教育長と共に出席した。この一坪図書館費の予算化により、51年度の山梨県の図書館図書購入費は全国一位の一人当たり42円となった<sup>19)</sup>。

県政の財政的バックアップを得ると共に、「子どもたちに芝生の庭で、夢のある建物で……、そんな子ども図書館を建ててあげたい」と未来を語る上野と接して、浅川の一坪図書館を普及させるという使命感は益々強くなっていった。この使命感は、もはや浅川一人に留まっていなかった。県立図書館の職員はもとより各市町村教委や地域ボランティアの一坪図書館設置・運営の気運は高まっていったのであった。それは次のように綴られている。

一坪図書館は恵まれない農村にとると愛の灯です。婦人会、PTA、

### 山梨における文庫活動（伊東）

区の協力のもとに青少年育成会の役員が当番になり、毎週の借出しに当たったが、形式に流れ子供との結びつきに欠けるので現在は私が全責任をもって運営に当たっています。（中略）一坪図書館が十分に利用され、その愛の恵みの灯がいよいよ輝き百年の計となり、より良い社会になるよう奉仕の気持に燃えるものです<sup>13)</sup>。

（略）この一坪が目ざしているものは、県下隅々の子供たちにも、よい環境を、そして、この仕事はあくまでもボランティア精神であること。こんな素晴らしい言葉が私の心を強くゆさぶった。その当時、家族としての夫と2人の娘の私への理解と協力は今でも忘れることはできない。妻として、母としてではなく、一人の人間として、社会に対する参加、協力であるの意を得て、開設の申請をし、許可された際の感激は、とても筆舌には表せない<sup>14)</sup>。

（略）文教施設としては、4年生までが通学する分校があるだけで5年生以上の児童及び中学生は3k程下の本校と五開中学校へ通学しています。この環境のなかで図書に接する機会は極めて少なく、本を通しての人の集り、心のふれ合いはなかなか得られないのが現実でありました。本をとおして教養を高めよう、知識を広くしよう、技術を修得しようとする意欲と努力もその場がなく、毎日の生活が単調で味気なく、充実感のないモヤモヤとした心をいっていたのは私一人ではなかろうと思います。そんな折、幸いにも一坪図書館の存在を知り、町の教育委員会の協力により開設することになりました。農家という職業上、時間的な制約がありますので「一坪図書館だより」で拝見する、他の一坪図書館のような活発な事業活動はしておりませんが、確実に一步一步、本を軸とした豊かな心の輪を大きく育ててゆきたいと

## 山梨における文庫活動（伊東）

思っております<sup>15)</sup>。

こうした設置の気運は、各市町村の教育委員会の間に良い意味での競争意識をもたらし、一坪図書館の急増の一因となった。活動が始まった一坪図書館では、貸し出し業務を中心に、図書館まつり、おはなしの会など、各館の工夫したユニークな活動が展開され、全盛期を迎えた<sup>16)</sup>。

### 2 一坪図書館の減少期

ここでは、一坪図書館の各市町村への移管完了から減少期における浅川の不安や苦悩を明らかにする。これにより、行政の進める一坪図書館運動の限界や課題についても示す。

1985（昭和60）年、図書館総数のピークを迎えた一坪図書館であるが、わずか10年余りでそのほぼ9割が閉館となった<sup>17)</sup>。溢れんばかりの使命感の基に普及を続けた浅川が、この現実にとどのように直面し、解決を模索し、そして何を導き出したのであろうか。

#### 2. 1 運営上の課題への対処

一坪図書館に対し、県立図書館はあくまで運営を各市町村教委と、ボランティアを申し出た人が自主的、自立的に行えるよう心を砕いた。それは、県には市町村が主体となる県下図書館網の将来構想があったからだ。市町村に図書館運営のノウハウを得させようと考えていたのだ。例えば、館長の選任については、『一坪図書館の展開』の中に次のように述べられている。

この人（館長）のことについて失敗すれば、一坪図書館運動をも不成功に終わるおそれもあると考えられる。そこで、私は各市町村に館長

### 山梨における文庫活動（伊東）

選出を依頼すると、地域の有名人、知識人にかたよってくるであろうし、その人達にはたして実践活動が出来うるか疑問であると判断し、ボランティアに館長を依頼するという考えを出したのである。しかも、あるボランティアが、私の地域で一坪図書館を実施したいと申し出があっても、該当する市町村が承認し、ともに読書活動をするという気持ちがあれば一坪図書館を設置しない方針も決定した。（中略）このことは、一坪の実践活動をしたい人がいるが、市町村がのり気でないために、開設出来ないところも現在あるが、私どもは気長に意識の芽ざめを待ちたいと思う。強制的に設置した一坪図書館は不成功に終ると考えられる<sup>18)</sup>。

さらに、一坪図書館への配本は、「本来、市町村の読書運動は、市町村自体が自主性をもって実行すべきものであり、その上で資料、その他の援助についてはできる限りのことは図書館で行うという考えのうえにたって、図書館では、各市町村教委まで配本すること」に決まった。つまり、管内の図書交換については、市町村が責任をもって配本するシステムが考案されたのである。しかし、地方へ配本に行った先で、浅川はある現実を目にして考え込んだ。「はたして、本は動いているのかな？ 子どもは多く来ているのかな？」

開設後の数年間は、生きがいや使命感に燃えていたボランティアであったが、時間が経過する中で一坪図書館の形骸化を目にするようになったのである。

活動の状況は種々あって、ある山村の公民館の中にある一坪図書館は、階段を登って会議室用広間の前を通りすぎたその奥にありました。ある町のそれは、広い会議室の一隅にありました。‘子どものもの’‘親

### 山梨における文庫活動（伊東）

子で本を選ぶところ’ というイメージはなくて、とても形式的に感じられました<sup>19)</sup>。

現状を目の当たりにした時の想いを振り返り、浅川はこう話す。

図書館というものは、建物や本が用意されていれば良いという所ではない、人が関らなくてはその活動は発展するものではありません。大きくても、小さくても図書館は人の問題なのです。本当に子どもと、子どもの本の好きな人が集まってくるか、それがいつも心配でした。

公共図書館と文庫、子どもの本に関する研修を積み重ねてきた浅川には、1976（昭和51）年夏の「第8回全国子どもの本と児童文化講座」で、これからの公共図書館と文庫の方向付けを学ぶ中で、一坪図書館の問題点が明確になった。

行政がすすめた文庫には、必ず本は配本され、場所も提供されて形は早く整います。しかし、文庫を運営していく内容（心）が問題になっています。世話をしてくださる、自治会長、公民館長さんが、図書館や教育委員会からすすめられた人が多く、子どもの本の理解が浅いため、活発に運営されていません。（中略）文庫を積極的に運営していくためには、世話をする人は、子どもが大すきで、子どもの本を理解しようと心がける人でなければなりません<sup>20)</sup>。

一方、直接運営に携わっている一坪図書館長の側から問題点や疑問点も出された。一坪図書館間の情報交換のために隔月に発行された「一坪図書館だより」には、活動の喜びと同時に問題点や課題も言及されている。具

### 山梨における文庫活動（伊東）

体的には、以下のように記述されている。

- ・特に母親の関心がある家庭のみ多く利用されており、どのようにして一般の読書層を増すか
- ・本が少ないこと、子供たちがゆとりをもって読むことが出来るよう増冊をお願いしたい
- ・交換日があるので一週間近くの日が空白になったり、返還すると借りに来なくなる子どもが以外に多い。図書がいつも子どものもとにあって利用する方法を研究する必要がある
- ・利用者は2～5歳くらいの保育園児が最も多く、中高学年になるに従って少なくなる。中高学年の利用者を増やしたい
- ・町の他の館との連絡を深くし、年1回くらいの合同の催しものをしてほしい
- ・年1回でよいので、文庫や一坪図書館の責任者と研修会を開き、本に対する知識やそれぞれの運動等を交換し合い、先輩の皆様の指導をお願いしたい
- ・大人の読む率がまだまだ低く、今度は大人にも呼びかけたい
- ・公共図書館・一坪図書館にマンがをおくべきか
- ・最初の頃は来館者も多く盛況であったが、最近利用者が少なくなったことが残念<sup>21)</sup>

さらに、系統的な子どもの本の講座を実施して欲しいことや、読書会づくりに発展しても地域に適当な助言者がいないなどの声があがった<sup>22)</sup>。これに対して、県立図書館は、1974（昭和49）年に第1回の一坪図書館館長会議を実施以降、毎年話し合いの場を提供した。そこには県知事と教育長に出席を願い、意見交換や要望実現を図っていった。会議には、一坪図書

### 山梨における文庫活動（伊東）

館の事例発表、パネル討議、知事との対話が盛り込まれて、一坪図書館間の情報交換に役立てられた。「系統的な子どもの本の講座を実施して欲しい」という要望に対しては、1975（昭和50）年から「子どもの本の研究講座」を継続開講し、全国から子どもの本に関する専門家を講師に招いて、館長に参加を促した<sup>23)</sup>。これに加えて、県下で確実に活動を発展させていた前述の「山梨子どもの本研究会」「山梨子どもの本をひろめる会」「子どもの本の学校」「山梨県読書グループ連絡協議会」などの組織と一坪図書館が連携し、集会活動を共催し、運営上の助言を促し、館長の運営上の課題に対して「ともに考え、ともに苦しむ姿勢で」<sup>24)</sup>対処していった。

浅川自身は、各地域の一坪図書館長会議や、住民の読書会、読書に関連する討論会などに出かけ、助言者として館長と悩みを共有するために奔走した。1982（昭和57）年、一宮町で行われた「暮らしの中に、読書をどのようにとりいれているか」のテーマの下の座談会では、「今後、この地域で読書活動を進めるにはどうしたらよいか」の質問に対し、次のように助言している。

県立図書館から一坪図書館には、二百冊の本が来ています。それをどのように地域の人に伝えてくださるかは、それを預かる人だと思います。一坪図書館でも、中央図書館でも、司書という肩書きのある方であれば良いわけですが、本のことが好きで、子どもが好きな方がやってくくださることがとっても大切になると思います。（中略）子どもが借りに来たら、子どもたちと同じ気持ちで付き合っていただく、つまり利用する人たちのそれぞれの立場になるということですね。そんなことで少しずつ利用者も増えてくるのではないのでしょうか<sup>25)</sup>。



## 2. 2 推進の限界と理想の館長像

住民意識の開発、移動図書館の改善、地域図書館網への足がかり、の3点を目標に掲げて始まった一坪図書館運動であるが、1985（昭和60）年に当初の計画どおり600館全ての市町村移管が完了した。県立図書館からの移管完了とともに、一坪図書館数は急激な下降線を描く。活動状況の変化は、同年の1月に実施した「一坪図書館実態調査」<sup>26)</sup>で明らかにされた。

- ・館長の選任についてはボランティア（選出された人も含まれる）61%で、その他は区民の選出が39%をしめることになり、はじめの頃のボランティアを中心とする考え方がうすれた感がある。
- ・本の内容については、まあまあであるが約半数だが、古い本が多いので人気がないと答えている館が30%ある。
- ・活動状況はというのに対しては、「まあまあ」と答えたのが79%、「活発」と答えたもの11%、「活動していない」が6%ほどとなっており、活動はしているが利用がちょっとという声が多い。どの館も成人の利用が少ないこと。また「まあまあ」という中には、老人が趣味の本などを借りているのが含まれる。
- ・移管後の図書数の増減は、同数が60%、減32%、増8%（甲府市のみ）で、山間地域の減少が目立つ。館長のなり手が無い所もあるようだ。

浅川は、館長と共に悩み、考え、苦しむ中で、一坪図書館が長期に渡って存続できないことに関して気づいたことがあった。まず、館長の構成が、退職した教員、僧侶、農業従事者、主婦など50代から60代の人が多く、若い母親はほとんどいなかったのだ<sup>27)</sup>。各市町村教委が、各戸を回って募ったボランティア館長であるが、浅川が最後まで心配していた「本当に子ど

### 山梨における文庫活動（伊東）

もと子どもの本の好きな人、人と人のつながりを大事にする人」は、言い換えれば長く一坪図書館を存続させた人たちであった。

また、一坪図書館だよりの紙面上に館長の悩みは書き伝えられ、県立図書館としてそれに対応はするものの、運営上の悩みについて継続的、個人的に相談してくるケースは稀であった。そして何より、自主・自立をモットーに広めてきたこの活動は、市町村に任せる姿勢で来たために、県の行政人の立場としては指導の限界が生じて、踏み込んだアドバイスを控えたため、減少の阻止材にはなり得なかったのである。

ところで浅川は、行政人として一坪図書館をひろめる立場だけでなく、自宅で一坪図書館「やまぼと文庫」を運営する実践者でもあった。その実践者浅川は、「世話をする人」すなわち理想の館長像について次のように述べている。

文庫を積極的に運営していくためには、世話をする人は、子どもが大すきで、子どもの本を理解しようと、心がける人でなければなりません。子どもと、子どもの本が好きなおばさんと、たのしい本をさがしたり、何でもお話ができる、きめこまかな、肌のぬくもりを感じさせてくれる文庫を子どもは望んでいます<sup>28)</sup>。

その実践者浅川について語った手記がある。当時「やまぼと文庫」に通った女子中学生が書いたものだ。

（略）最初に文庫と聞いて、大きな図書館みたいな所だと思っていました。でもいってみると、ふつうの家の玄関に、たくさんの子どもの本がぎっしりつまっていました。私は少しびっくりして、これはどんな人がやっているのだろう。全部一人でやっているのかな。わたしの

### 山梨における文庫活動（伊東）

今まで見た図書館とちがって、本の数は少ないけれど、親しみやすい感じだな。と思いました。（中略）みんなが先生と呼んでいるのは、文庫を開いている浅川先生です。私の母よりも年をとっていますが、とてもおっとりした人で、明るい感じの、子どもの好きな先生で、楽しそうに子どもの中に入ってやっていました。はじめて来たのに、何の緊張感もなく、すぐに入っていけそうな、なごやかなふんいきがとてもいい印象的で、今でも忘れることができません。私はもう中学生になり、文庫の本はあまりかりないけれど、散歩のようなつもりで毎週文庫へ行って小学生とおしゃべりしたり、手づくり遊びをしたり、行事や毎月のたよりの計画を練って帰ってくるだけでも楽しいのです。今、文庫のために先生やお母さん方や、私たち子どもが手伝っているけれど、それはみんなが仲良くのびのびといろいろな事をして、本の楽しみや、すばらしさを知ってもらうためなんだろうと思います。私は文庫へ来て本当に良かったと思います<sup>29)</sup>。

子どもが何を求めているか、一坪図書館に必要とされる自主性、自立性とはいかなるものかを如実に物語っている。一坪図書館の急激な減少には、一坪図書館だよりから想像できるように、蔵書の数、予算の面、子どもの多忙化など様々な要因が重なり合う。しかし、世話をする人の志がどれほど大切かを身をもって知っていたのが、長年に渡る子どもと子どもの本に関する実践者である浅川であった。浅川は言う。「県が本を貸して広がるものではない。人がかかわらなくては……。」

浅川は、一坪図書館「やまばと文庫」を30年もの長期間継続できた理由を、甲府文庫連と共に歩んできたからだとして述べている<sup>30)</sup>。甲府文庫連とは、地域の子どもたちに読書の楽しさを伝えようと1975年に自発的に始まった甲府の子ども文庫の連絡会である。「毎月1回の例会で話し合い、情報交

### 山梨における文庫活動（伊東）

換をすることで、やめなくなった時に勇気をもらったこともありました。」そして、浅川に勇気を与え続けた文庫連の存続の理由は、「市と市立図書館の、住民の自主的な活動を支えるという援助があったから」<sup>31)</sup>とも述べている。まず、自主的な文庫運営への志があり、次に行政と主体的な住民の相互交流が成立してはじめて、「県下あまねく地に長期的に存続する文庫を」という壮大なプロジェクトが可能になることを浅川は実感していたのである。

### 3 まとめ

昭和40年代、山梨県立図書館で嬉々として読書する子どもたちの姿を目にして、「住む場所の差なく、すべての子どもの身近に本を」という願いから出発した浅川は、賛同者や協力者を開拓していきながら、県立図書館の一員として県内各地への一坪図書館の設置という大きな夢を実現させた。浅川は、一坪図書館の構想に着手し、それを普及させるために自ら率先して学び、協力者と共に悩み、苦難を解決する姿勢を貫いた。

彼女の60年にも及ぶ「子どもと子どもの本」と共に歩む人生は、ただ行政人としての活動の一面ばかりではない。彼女は一坪図書館を実際に運営した実践者としての一面も合わせ持つ。この多面的な活動の中で得たのが、「単に本を用意すればよいのではない。人の心が関らなくては、一坪図書館の継続的な発展は可能にならない」という実感から得た信念であった。読書は本来個人的なものと考えられがちである。しかし、子どもが好き、子どもの本が好きでスタートした浅川は、子どもが楽しい読書を行うためには、本と出会う場の雰囲気や、本に出会わせてくれる大人の役割がどれほど重要かを身をもって知り得たのであろう。

当時、子どものために、そして住民のために県立図書館が地域へ呼びかけて一坪図書館の設置を進めていくその心構えを、浅川は代田昇氏の言葉

## 山梨における文庫活動（伊東）

をもって次のように掲げていた<sup>32)</sup>。

1. その運動の推進者が、ほんとうに子どものためを考えているか。
2. また、推進者たちが、子どもの本の研究をしているか、あるいは、真剣に取り組みつつあるか。
3. 推進者達が形式的であったり、上をむいていたりしないで、民衆の立場になって、運動を進めようとしているかどうか

この言葉を指標として、一行政人として一坪図書館の興隆を支え、一実践家として短期間のうちに多くが衰退していく様を見ていたのである。

一坪図書館の活動は、鎮火したかのように思われた。しかし、「すべての子どもの身近に本を」という浅川の蒔いた志は確かに一坪図書館を利用した大人や子供たちの心に残り、「地域に充実した動かない図書館を」という要求の火となって、再び燃え上がっていった。一坪図書館運動開始から14年後、300坪の石和町立図書館の建設を皮切りに、昭和町、白根町、敷島町と相次いだ市町村立の図書館の新設ラッシュがそれを物語る。平成18年の時点で、山梨県内の未設置町村は、全29市町村の内、わずか4町5村である。

多くの親子が集まり、ボランティアの読み聞かせが行われる新設図書館には、「子どもへの心のこもったサービス」が重点目標として掲げられている。

### 注

- 1) 藤原斉『一坪図書館の展開』山梨県立図書館、1976、p.29
- 2) 全国子ども文庫調査実行委員会編『子どもの豊かさを求めて3—全国子ども文庫調査報告書』日本図書協会、1995、p.6
- 3) 1985年の文庫数の全国平均が不明のため、1980年と1993年の間の推移は推定である。
- 4) 前掲書1

山梨における文庫活動（伊東）

- 5) 甲府文庫連絡会『なでしこー甲府文庫連絡会25周年記念誌ー』2000、p.30
- 6) 浅川玲子「山梨にひろがる一坪図書館運動」『子どもの本棚 季刊7号』日本子どもの本研究会編、明治図書、1973、p.72
- 7) 前掲書3、pp.72-73
- 8) 前掲書2、pp.31-32
- 9) 前掲書1、p.14
- 10) 前掲書1、p.53
- 11) 1978年からは各市町村に移管され、1985年度末にはすべてが移管完了した
- 12) 浅川玲子「文庫と公共図書館をむすぶもの」『子どもの本棚 機関19号』日本子どもの本研究会編、明治図書、1976、p.96
- 13) 山梨県立図書館『一坪図書館だより集録号 No.1』1977、p.4
- 14) 前掲書9、p.11
- 15) 山梨県立図書館『一坪図書館だより集録号 No.2』1978、p.17
- 16) 各一坪図書館の活動内容の詳細については『一坪図書館だより集録号』No.1～No.5を参照
- 17) 伊東久実「山梨における文庫活動ー青沼文庫 楠祐子の活動ー」『所報』2007、p.41
- 18) 前掲書1、pp.39-40
- 19) 前掲書11、p.14
- 20) 前掲書8、p.97
- 21) 山梨県立図書館『一坪図書館だより集録号』No.1～No.5、1977～1981
- 22) 前掲書1、p.91
- 23) 前掲書1、p.64
- 24) 前掲書1、p.92
- 25) 一宮町教育委員会、みどり号運営委員会、一坪図書館長会『読書推進大会記録大会10周年』1982、p.37
- 26) 山梨県立図書館『一坪図書館だより第37号〈最終号〉』1985、pp.4～5
- 27) 前掲書1、p.42
- 28) 前掲書8、p.97
- 29) 山梨県立図書館『一坪図書館だよりNo.4』1980、p.16
- 30) 甲府文庫連絡会30周年記念誌『なでしこ』甲府文庫連絡会、2000、p.29
- 31) 前掲書26、p.2
- 32) 前掲書3、p.72